図解 水に暮らす人々

明治以降、近代化が進むと、外国からの輸入品や国内のさまざまな地域から多くの物資が東京へ運ばれるようになった。水路がたくさんあった中央区では、このような荷物は船で目的地まで運ばれていた。そのため、船で荷物を運ぶことを仕事にし、その船で生活をする人がいた。彼らを水上生活者とよんだ。

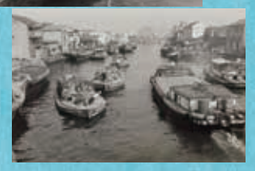
荷物を運ぶ船

隅田川は水深が浅いため、たくさんの荷物を積んだ大型船は、河口までしか入ることができなかった。そこで小回りがきく小型船に荷物を積みかえ、問屋や工場の倉庫などがある河岸に運んだ。そのような小型船を「はしけ」といい、いろいろな種類があった。

大型船から小型船に積みかえ、倉庫まで運ぶ。

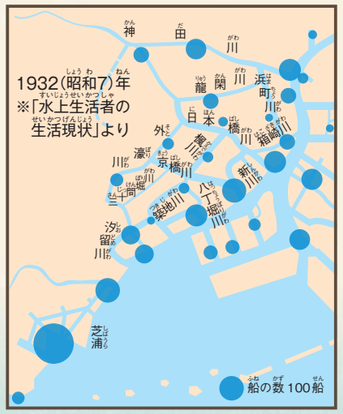
●運ぶもの

そのほかに汚泥、油、大豆など。



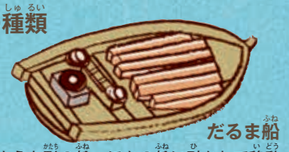
倉庫が空いていないときは、何日も荷物を積んだまま川岸で待った。そのため船で生活するようになったようだ。

水上生活者の分布図



中央区では、箱崎川、新川、八丁堀川、築地川に多く見られた。東京港が未整備だった昭和のはじめは、横浜港まで行く船もあった。

●船の種類



だるま船

だ円のような形の船。ほかの船に引かれて移動した。幅が広く、ころんとした形のため、だるまと名づけられたといわれる。

伝馬船

名前は、江戸時代に宿場に置かれた馬にちなんでいる(→p.41)。手こぎの船で、渡し船にも使われた。

船乗りには階級があった

❶親方
荷物を運ぶ会社を経営(回漕業)。今の運送会社の社長に当たる。

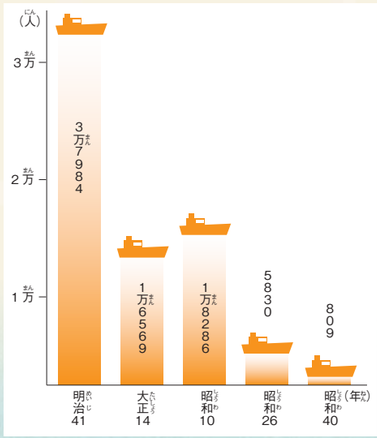
❷船指
荷物の割りふりやスケジュール管理、船乗りの世話やお金の支払いなどをした。

❸船子世話人
船指の部下で、平人の先輩。船乗りをなん年か経験している人。

❹平人
船子世話人の下で働くいちばん経験の浅い人。

※読みは『水上労働者と寄子の生活』(文明協会)を参考とした。

東京の水上生活者の数



第二次世界大戦後には、ぐっと数が減り、今ではいない。
※国勢調査、東京都民政局調査より。

高瀬船

運航しやすいように細長く、浅瀬で使われた手こぎの船。数人が乗りこんで、こぐ大型のものもあった。

曳航船

エンジンを積み、ほかの小型船を引く船。

生活の場となった船

荷物を運ぶ船(はしけ)は、荷物を積む部分の下を部屋にして生活をした。この部屋を「セジ」(せいじ)とよんでいた。船尾に台所スペースがあり、はしごで下の部屋へと出入りをしていた。お風呂はなく銭湯へ行っていた。

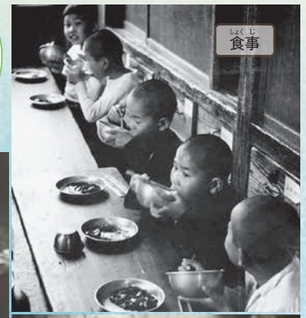
子どもたちは水上小学校へ

水上生活者の子どもたちの学校問題は大変だった。家である船は、昼間に移動するので、子どもが学校から帰ってきても、どこへ行ったかわからなくなったり、学校から遠くへ移動してしまったりして、学校へ行くことができないこともあった。そのため、1930(昭和5)年に、寝泊まりできる寮つきの「東京水上尋常小学校」(月島校舎)ができた。

1943(昭和18)年にできた深川校舎。だんだんと水上生活者も少なくなり深川校舎は1966年に、寮だけとなった月島校舎も1970年に廃止となった。

月島校舎は今の月島第二小の前の、勝どき児童館の場所にあったんだって。

土曜日の午後に船に帰り、月曜日に学校へ戻る。帰るときは、親の会社に電話をして船の場所を聞いてから、寮を出る。



船の上で食事をつくり、洗たくもした。子どももよく家事を手伝った。